

## まとめ

[0] 以上釈尊と仏弟子たちの1日を調査し、考察を加えてきた。最後にこれらを簡単にまとめておきたい。

[1] 釈尊と仏弟子たちの1日は、次のような7つの時間帯に分けることができる。

- (1) 日の出から午前10時半頃に乞食に出かけるまでの早朝時分
- (2) 乞食に出かけてから食事をし、その後片づけが終わる午後1時頃までの食事時分
- (3) 食事の後片づけを終えて夕刻までの午後時分
- (4) 午後時分を終えて日没までの夕方時分
- (5) 日没から翌日の日の出までの夜を三分した最初の初夜時分
- (6) 夜を三分した真ん中の中夜時分
- (7) 夜を三分した最後の後夜時分

そしてこのそれぞれの時間帯には、それぞれ特徴的な生活様態があったから、そこで本稿では、その特徴的な生活様態を含めた時間帯という意味を込めて「時分」ということばを用いたのである。

[2] ところで、それぞれの時分に行われる釈尊と仏弟子たちの生活様態については、第4節においては釈尊の、第5節においては仏弟子たちの、それぞれの時分の生活様態を考察した時に、その時分の考察の最後において簡単にまとめておいたので、それを参照いただくこととして、ここで再びそれを行うことは省略する。ただしその生活様態の基本を考えることによってこの論考の総括としたい。

[2-1] まず第1は、それぞれの時分にはそれぞれ特徴的な生活様態があるが、規則としては、食事は夜明けから正午までに摂り、それ以外の時間帯には摂ってはならないという規則と、食事時分以外には村や町には特別な所用がないかぎりできるだけ入らないようにするという規則があるのみであって、これを犯さないかぎりは基本的には何をしても自由であったということである。仏弟子たちは多くの場合は僧院で共同生活をしていただけれども、カトリックの修道院での生活のように、規則によってがんじがらめに縛られていたのではなく、行動の自由が保障されていたのである。また釈尊の教えはきわめて合理的なものであったから、何をしてはならないというタブーというようなものもなかった。したがって自分の意思で、したいことを自由にするというのが基本姿勢であったということができる。

換言すれば、それぞれの時分になされるそれぞれ特徴的な生活様態は、戒律などによって外部から規制されたものではなく、慣習的に形成されたものであって、そのような生活様態を取ることが合理的であったからといってよいであろう。したがってそれらはあくまでもこの時間帯にはこのような行動がなされるということが比較的多いという傾向を表わすのみであって、その生活様態から外れることもいっそうに差し支えなかったということになる。

[2-2] 第2は、釈尊はもちろん仏弟子たちの毎日の生活は、布薩とか自恣などの定例行事や、特別の議題によって招集されて羯磨を行う時以外は、基本的には個人行動であって、サンガとして行動することも、4、5人が集まって集団行動するということもなかった、と

いうことである。

ただし個人行動といっても、それは一人前の比丘あるいは比丘尼のことであって、共住弟子あるいは内住弟子として、和尚や阿闍梨に依止して生活万般の指導を受けなければならない者は、実際はいつもついて回っているということはなかったけれども、基本的には和尚や阿闍梨の指示に従って動くことになるから、個人行動が認められていないということになる。したがって和尚と共住弟子、阿闍梨と内住弟子の関係にある者たちは、就寝する時以外の時間は、師と弟子が2人で行動するということが多かったであろう。

[2-3] そして第3は、基本的には釈尊と仏弟子たちの生活様態は、教えるものと教えられる者との立場の違いはあったけれども、基本的には差異がなかったということも上げることができるであろう。換言すれば基本的なところでは主従関係というものはなく、釈尊も仏弟子たちも平等であって、弟子たちが釈尊の命令で動くということにはなかったということになる。

(2011.8.18)